

# MANGA

「アルファ」事後インタビュー  
Q.弟さんがご自身の愛妻に求婚していた件についてどう思いましたか？



SEE YOU AGAIN 2023



## オブジェクトのコメディア・デラルテ

爽やかな春の訪れを風にのせて、マティヤさんの人形音楽サーカスがはじまるよー！と言わんばかりの、わくわくした空気に包まれる朝。開くと口のように動くアコーディオンを携えたマティヤさん。

背後にはピアノがある。そしてお馴染みのパンダのパペット。(しかし、本編には登場しない) 開始早々、この劇は「ハッピーエンドである」と告げるマティヤさん。イタリアから来た友達のプルチネラを呼ぶ。彼には特別な力がある。「決して死なない」ということ。しかし日本初来日の彼は時差ボケを起こしなかなか起きない…。彼がいるはずの段ボールの中を覗いてもだれもいない。通訳の山口遥子さんはマティヤの合図で舞台裏に回るも、結局プルチネラはそこにいた。(姿を消すなんて、プルチネラのいたずらだろうか！) 白い布の裏から、小さな亀のような頭をみせるプルチネラ。山口さんの「なんて素敵な声

でしょう」というアナウンスに不釣り合いな、甲高くコミカルな声。そのずれが笑いを誘う。プルチネラのジャパニーズソングに不意を突かれながら、カスターネットは怖い犬へと姿を変え、アコーディオンは、やがて怪獣となり犬を飲み込んでいく。プルチネラは怪獣を倒したが、死神との攻防戦に巻き込まれる。子どもたちの歓声が舞台に应答する。老若男女問わず、子どものまなざしでマティヤさんの喜劇に巻き込まれる。プルチネラの500年の人生がついに死神に奪われようとするとき、マティヤさんが笛を吹くその右手が、アコーディオンを奏でるその右手が、プルチネラそのものになる。そして左手そのものが悪魔となり、死を携えて、共に音楽を奏でる。マティヤさんがわたしたちに魅せてくれたのは、音楽への愛と創造の魔法であった。

プルチネラの魂は私たちの指に、音楽に、宿りつづける。たとえ何かが失われても、ひとの手で紡ぎ直せるということ。この手から、よりよい世界を創造していけるということ。ちょっぴりダークでちゃっかりした、可愛らしくも風刺的なプルチネラとマティヤさんの存在は、芸術の普遍的な力を映していた。シュールクリーム一座(デイリージャーナル編集部)

絵:Mayuky Kahn(デイリージャーナル編集部)

## CLOSING!

約1週間続いた第二回下北沢国際人形劇祭も、とうとうクロージングの時を迎えました。なんとここで上演されたのが、スロベニア人形劇界の巨匠マティヤ・ソルツェさんの新作。会場のアレイホールは立ち見も続出の満員となりました。上演された作品は、デスクライトのついた机で上演されるシンプルなもの。演者は羽織のような服をひっかけた落語家のようないでたちのマティヤさん一人と、数人による音楽の生演奏です。どこかマティヤさん本人にも似た顔の人形はマティヤさんの左手で操られています。人形は「BOOK」と書かれた段ボールで作られた本のページをめくりながら、「昔々あるところに…」とお話を書き始めます。ここからマティヤさんの本領発揮。観客にそのあとのストーリーの展開を尋ねると、「ラーメン」との返答がありま

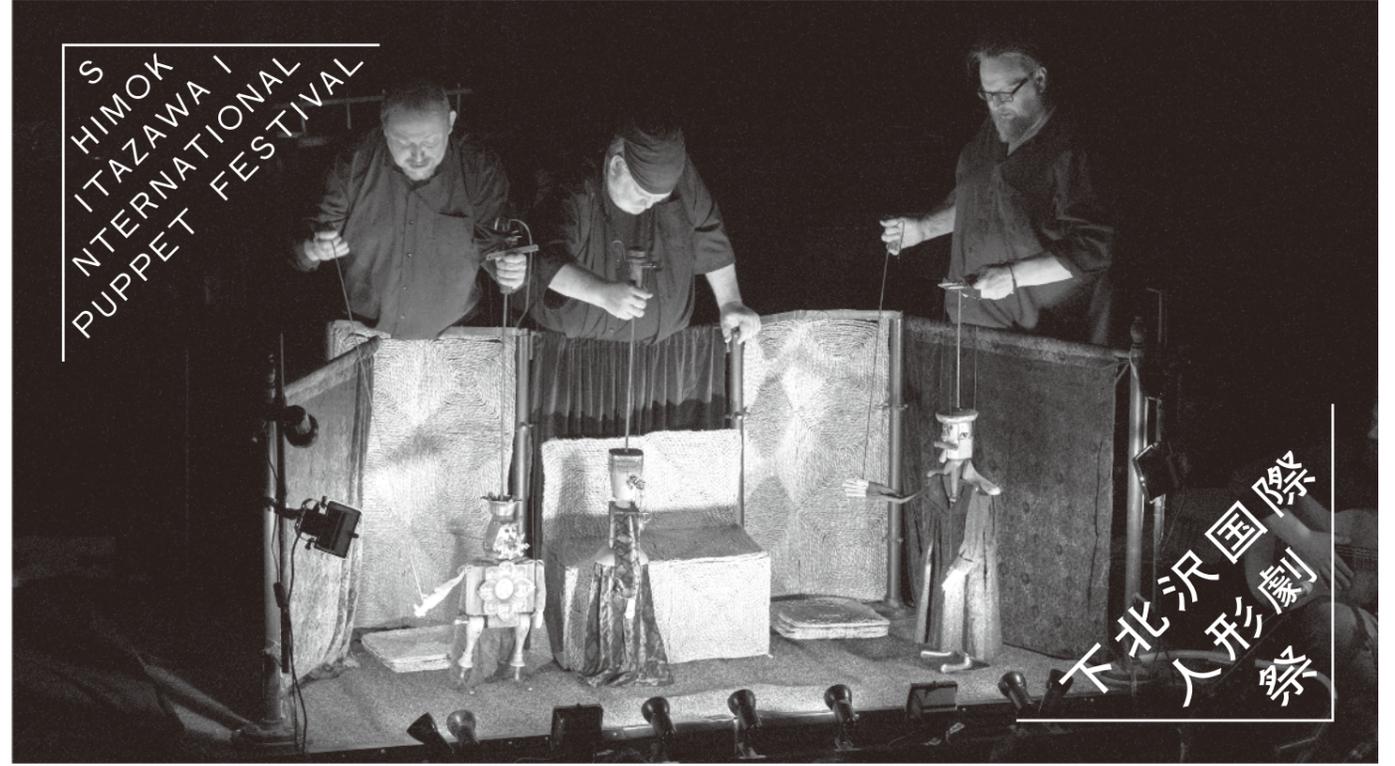
編集を終えて  
SIPFの期間中、デイリージャーナルを手にとっていただき、どうもありがとうございました。このように、ボランティアの方々による劇評やイラストを掲載したフリーペーパーを発行しているフェスティバルは、そう多くはないのではないかと思います。毎日、公演前に配布できるよう編集とレイアウトを仕上げるのは、正直とても大変な作業でした。それでも、前回以上に多くのお客さまが寄せ書きを残してくださったことは大きな励み

した。すると、「ラーメンがありました…とても熱くて周りが耐えられないほどでした」と語りながら物語のイメージをどんどん膨らませ、最後にはそれを「これが日本の温泉の始まりでした」と締めくくる力技。言葉のイメージが観客とやり取りされるまさにそのことによって、机の上に新しい物語が立ち上げられていきます。つまり、マティヤさんが提供するのは空白のページのような枠組みのみで、観客からの言葉と反応によってはじめてフィクションがそこに立ち上がるのです。スペイン語で語られるカウボーイの物語や英語で語られるカエルのようなモンスターの物語がそれに続き、人形は机を飛び出して演奏家の頭の上や壁を飛び回ります。彼らが最後は机の上の本の中に帰っていくと、会場が割れんばかりの拍手が起きました。上演のあとも、アーティストを含めたくさんの人たちが2年後の再会を誓い合いながら、お酒とおいしい食事を楽しんでいました。  
朴建雄(デイリージャーナル編集副代表)

となり、私たちも楽しく編集作業を進めることができました。  
また、フェスティバルセンターで編集作業をしていると、「今日のデイリージャーナルありますか?」と声を掛けてくださる方も多く(アーティストの方々も含めて)、楽しみにしてくださっている方がたくさんいらっしゃることを実感し、とても嬉しく思うと同時に、大きなやりがいを感じました。  
Hand Saw Press ソンユエ、阿部楓

# 第2回下北沢国際人形劇祭 2026 DAILY JOURNAL

DAY8  
Tuesday 24,  
February,  
2026



2月17日から7日間にわたって開催された第2回下北沢国際人形劇祭は、23日に無事閉幕しました。ご来場くださった皆さま、本当にありがとうございました。そして、毎日発行してきたデイリージャーナルを手にとってくださった皆さまにも、心から感謝申し上げます。夕方の公演に間に合わせるため、限られた時間と少人数で、原稿チェックからレイアウトまでを一気に仕上げる日々。至らない点多々あったことかと思えます。それでも多くの方が読んでくださり、最終日にはほぼすべての号を配布し終えることができました。これは、毎日、素晴らしい劇評やレポート、イラストを全力で届けてくださったデイリージャーナル部員の皆様のおかげです。ボランティアで参加してくださった皆さんに、この場を借りてあらためて心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました!

では、最終日 DAY7 のご紹介です。この日も恒例の『朝ごはんトーク』からスタート。前日に公演を行ったカンパニー・バケリットのお二人をアレイホールにお迎えし、作品の裏側や創作の背景についてたっぷりお話をうかがいました。お昼には『BONUS TRACK 冬市 × 下北沢国際人形劇祭』と題したマーケットの会場に隣接したピアツァで、マティヤ・ソルツェさんによる無料公演『オブジェクトのコメディア・デラルテ』が上演されました。立ち見が出るほどの大盛況で、会場はマティヤさんの熱演に負けないほどの熱気に包まれました。スズナリで行われたメイン・プログラムは、チェコ人形劇界を代表するアルファ劇場による『ドクター

ファウスト & ドン・ファン』の二本立て。超満員となった客席の観客は、伝統の技に支えられたヨーロッパ古典の世界へと深く引き込まれていました。その裏では、マティヤ・ソルツェさんのワークショップ『オブジェクトとリズム』、そしてミハ・アルファさんのミニ無料公演『シェフのミツツイ』も行われ、会場のあちこちで人形劇の魅力にあふれる最終日となりました。そして、アレイホールで開かれたクロージング・イベントでは、今回の SIPF で大活躍だったマティヤ・ソルツェさんがサプライズで新作を披露!最後の最後まで、観客の皆さんとともに作り上げてきた SIPFらしい高揚感と一体感に包まれました。

最後になりましたが、この7日間、人形劇から生まれる自由なアイデアや批評のまなざしが、きっと皆さんの生きる助けになると信じながら、ひとりひとりがこのフェスティバルを運営してきました。そんな私たち SIPFのメンバーが大切にしてきた、パンクで、フェミニズムで、そして同調圧力や権威に抗おうとする気持ちを、どこかで感じ取っていただけましたら幸いです。2年後、また皆さんにお会いできることを楽しみにしています。それでは、第2回 SIPF、最後(幻?)のデイリージャーナル DAY8をどうぞお楽しみください。  
三井武人(デイリージャーナル編集代表)

舞台の上手に男性が座り、ギターを弾き始める。少し悲しい旋律に合わせて、3人の男たちが歌い、人形劇が幕を開ける。『ファウスト博士』は悪魔と契約を交わし、死後の魂と引き換えにこの世の快楽を追い求めた男のお話。『ドン・ファン』は放蕩の末に婚約者の父親を殺し、引き返せない所まで墮ちていく。どちらの作品も、登場する人物は滑稽で皮肉屋。金に執着し、恋に現を抜かし、召使いはいつもうっかり主人を破滅させる。現世の栄華や一時の快楽に溺れて身を滅ぼすことなかれ、と教訓を伝えながらも、欲望に抗えない人間の性をおもしろがるような、愛おむような、シニカルかつ温かい視線が感じられた。  
登場する人形たちはみな、その素材も造形も身体も、非常に自由だ。木、鉄、ブリキ、ベルベット、レース、サテンなど、異なるテクスチャが組み合わせられ、頭にはやかん、バケツ、腕はおたまやフォークで、輝く瞳はガラス玉。たまに胸の蓋が開いて心臓が赤く光り、心が踊れば胸がパカパカ、気ままに動き回る。こんな風に身体の形が自由で、触り心地も様々で、胸の蓋がパカッと開いたりしたら楽しいだろうなあと、ときどき人形が羨ましい。  
舞台美術のデザインも巧みだ。客席に対して扇形に開かれた背景の上下には幕が、正面にはパネルが置かれ、それぞれは

## メインプログラム MAIN PROGRAM

# ファウスト博士 / ドン・ファン Divadlo Alfa



In Alfa Theatre's Doctor Faustus and Don Juan, the flames of desire flicker and grow in the heavy, melancholic tones of Central Europe. The old-fashioned, hand-manipulated puppet theatre moves at a slow pace and evokes nostalgia. Perhaps we have experienced something like this before. In fact, these two performances address something that we humans have perpetually repeated—an inferno of stinky relentless desire. The puppets are made from vintage tools and mechanical parts—for instance, Mephistopheles, the devil who tempts Faustus, has a body like an old bicycle saddle, springy legs, and chain-like arms. They resemble strange toys, and the actions and desires they perform on stage are childlike in their simplicity.

Doctor Faustus makes a contract with the devil and becomes gradually consumed by the power he believes he controls. At the moment of signing, he hears an inner voice warning him of deception. He even asks Mephistopheles for a crucifix to pray, feeling lonely and sad after transforming the palace of the King of Portugal into an ocean where sickle-seahorses and wrench-fish swim among the soap bubbles and the bubbling sounds created by the puppeteers. Faustus wants to display his power to the king and the queen whom he loves, but when the king realizes the art is derived from evil, he expels Faustus. After eighteen years of solitude within the thirty-six-year contract, Faustus discovers the devil's trick: "day and night" work counts

double. Despite the help of the servant puppet Kasperek, he is dragged toward the gates of hell.

Don Juan, in contrast, does not calculate. Betrayal enrages him. He kills without hesitation—his own father, his fiancée's father, and his own brother—unlike Faustus, whose damnation is procedural. In the final scene, when his father's ghost burns his hand with a candle, the fire is real, and we physically feel the shock. Then he is also dragged toward the gates of hell, this time amid a huge flame. We have the power of empathy to feel the heat when the rake-like hand of an inorganic puppet is exposed to the small fire of a candle, but at the same time we cannot feel the suffering of others when we burn them with the fire of our desires—greed, vanity, and envy. Between Faustus and Don Juan, two forms of desire emerge: one structured by calculation, the other driven by rage. Both destroy.

And yet Faustus feels disturbingly familiar. We too sign agreements whose full implications we rarely grasp. We exchange data, time, attention, even identity for promises of efficiency and intelligence. Like Faustus, we assume the counting is transparent. Only later might we realize the arithmetic was designed elsewhere. In this sense, damnation today is rarely theatrical; it is administrative. It arrives through systems—what some call neoliberal governance or the "Authoritarian Stack"—where identity becomes a

木の扉や鉄柵など単純なモチーフだが、その組み合わせによって宮殿になったり墓場に見えたり、イメージを増幅させる。劇場の中で、遠目にみても十分素敵だったが、例えば野外の広場で、桟敷席からみることができたら、本当に釘付けになってしまうのだろう。

アルファ劇場の4人の絶妙な"ゆるさ"と、ちょっとした掛け合いの良さも相まって、演者と観客、観客同士、相互に豊かな時間を分かち合うことができたと思う。ああ人形劇っていいなあと思わせてくれる、フェスティバルの最後にふさわしい作品だった。

大澤萌  
(デイリージャーナル編集部)

commodity bought and sold on the market and sovereignty shifts toward private technological power. We are not dragged to hell by visible flames; we enter contracts.

Kasperek, the enduring puppet figure who survives centuries of imperial rule, embodies another possibility. Under Austro-Hungarian domination, the Czech language survived in puppet theater when it could not in public institutions. The puppet is small, embedded in systems it does not control, yet never entirely silent. Kasperek is both the Czech nation—having been ruled by superpowers—and, symbolically, all of us. We are forced to obey structures built by others' desires, hoping to gain a position of command someday, even through dubious means.

The performances appear to offer moral lessons to children. In fact, they pose a more difficult question to adults: if desire is inevitable, how should it be organized? Through our emotions or contracts imposed by systems we barely perceive? And ultimately, who writes the terms? Just as Faustus did not foresee the hidden terms of his contract, we, too, enter agreements with AI and tech giants whose fine print and algorithms we barely understand. Should we blindly seek new masters like Kasperek, or pursue endless desires, as Faustus does? Definitely not.

KenyuPaku  
(デイリージャーナル編集副代表)

## BONUS TRACK 冬市



『BONUS TRACK 冬市 X 下北沢国際人形劇祭』は、カフェや本屋が立ち並ぶ通りで開催されました。最終日が祝日と重なったこともあり、会場は大いに賑わっていました。人形劇祭を目的としていない方々も、ふらりと立ち寄れるようになっていました。劇場にて開催の公演はチケット要予約ですが、このように街との接点を重視したプログラムも開催されるのが本演劇祭の魅力です。これを機会に下北沢の街を散策するのも楽しい！さらに併設する Gallery 2 では、第一回下北沢国際人形劇祭の映像アーカイブの上映がありました。第一回に参加できなかった方々も写真展示や映像上映で雰囲気味わうことができます。こちらでは過去のデイリージャーナルの配布や人形劇に関連した本の紹介も開催されており、「人形劇祭って何？」という疑問を解決出来る場となっていました。人形劇祭入門としてぴったりのこのような空間が、下

北沢の街と融合して存在していることは、SIPFの未来にもつながっていくのだろう。宮原紗代 (デイリージャーナル編集部)



## マティヤWSレポート

『マティヤ・ソルツェによる「オブジェクトシアターワークショップ」』の2日目。音楽家でもあるマティヤさんの作品に欠かせないのがリズム (音楽) である。今回はリズムとオブジェクトに関するワークを複数行なった。大切なのは、ひとつひとつの動きを文節化することだという。自分の片手をオブジェクトとして形を変化させていくワークでは、「手を見る」「触れる」「動かす」「放す」「顔を元に戻す」をテンポよく繰り返し、リズムを作っていく。文節化してリピートされることによって、手でさえも特異なオブジェクトに変わる。実際にやってみるとかなり頭が混乱してくるワークだが、この方法を使えるとパフォーマンスを観る人への伝わり方が明確化することは間違いない

と思った。マテリアルを使ったワークでは2.3人がチームになり、ビニール袋や紙コップを手、足、頭に見立てたひとつのキャラクターを操演。チームごと「特定のスポーツ」→「夢の世界」→「特定のスポーツ」を一連の中で表現するというもの。発表時は、なんと豪華なことにマティヤさんが演奏する音楽つき！各チームの独創的な作品が、さらにフィードバックを受けてオブジェクトに魔法がかかっている瞬間をたくさん見ることができた。2日間のワークショップで得た内容はマティヤさんの人形劇哲学のほんの一部だったかもしれないが、それでもたくさんの可能

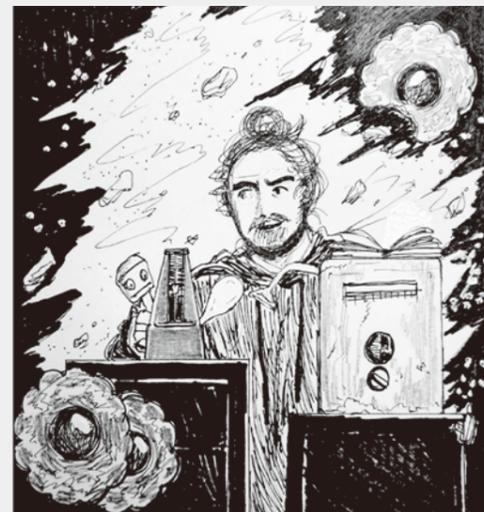


性を感じることができた。最後に、オブジェクトから動き方を学ぶということ、いつも新しい視点でいることが大切だということを受け取った。もっとオブジェクトと仲良くなりたい。梶野ひなこ (デイリージャーナル編集部)

## ミハ・アルフ『シェフのミッツィ』

すっかり春の陽気のSIPF最終日、BONUS TRACK GALLERY 2では、ミハ・アルフさんの『シェフのミッツィ』の公演が行われました。指人形のミッツィのクッキーの作り方はなんともワイルド。伸ばし棒をふりまわし、小麦粉を客席まで飛び散らせながら、ジャム入りクッキーを作っていきます。前方の桟敷席に座っていた仲良しの2人のお子さんは2日前の同じ公演にも来ていたようで、ミッツィが登場すると、

「これからクッキーを焼くんだよ！」と、会場みんなに教えてくれる一場面も。それから2人は、メトロノームに合わせて左右に頭を揺らしたりと、身体全体で人形劇を楽しんでいて、会場はほがらかな空気に包まれました。公演の終わりには、観客にスロベニアのジャムクッキーが振る舞われ (すごく美味しい...!)、ミッツィのとっても楽しい思い出を皆で持ち帰りました。陰山桃花 (デイリージャーナル編集部)



絵: 大澤萌 (デイリージャーナル編集部)

カ シュパーレクが繋ぐ2つの物語。それは舞台上の人形の口から放たれる火で表される「地獄の炎」と呼べる人間の欲望の底知れなさを、《回す》舞台上の仕掛けを用いることで、この世の輪廻として提示する。

神に仕えることと地上の栄華を極めることの間で翻弄されるファウスト博士。下手側、左手で楽器の弦を弾きながら右手でぐるぐると取手を回して音楽を奏でるミュージシャン。時計の針を巻くように、操り人形の世界にはじまりの合図を告げる。場面そこかしこで鳴らされるシンバルの音と人形遣いが人形をぐるりと後ろに回すしぐさ、それは共に風を呼び、時空を飛び超えていく。悪魔の造形は無機質な素材でできており、動かす度にカチャカチャ鳴る音と真っ赤に光る目が機械的で不気味である。悪党のダンスの時間に人形遣いが人形を力強く持ち上げる様には業を背負っている人形の重みを感じられる。ファウスト博士にすりよる陛下の軽やかでくるくるとした動きや腰の可動域は見事で、欲望に目がくらまされる陛下をコミカルに表現している。薄い紙に描かれたダビデと巨人のゴリアテも、神か悪魔のどちらに仕えるのかを思わせ風刺的である。視覚的な表現で特に印象的だったのは、シャボン玉の泡に薄緑や紫の光を放つ深海の場面。海にはタツノオトシゴ、洗濯バサミのようなかたちの魚の群れ、ドラム缶で造られたかのようなチョウチンアンコウ

が泳いでいる。海を泳ぐモノたちの神秘的な様子に、ファウスト博士の欲望も水に溶け流れ、浄化されるようだった。しかしこの欲望は循環し、水を伝ってわたしたちの中に流れゆく。

お金にだらしなく、アンナを支配しようとするも弟に彼女の恋心を奪われ、哀れにも彼女の父を殺してしまう男、ドン・ファン。そのアンナの揺れ動く恋心は、冒頭、彼女がブランコに揺れる動きや胸元の飾りを上下させて感情の高鳴りを表現するところからも伺える。ドン・ファンがアンナの父を殺し、その父が呪いの炎を抱き幽霊に変身する場面では、父が回っていた手押し車から身体がふんわりと軽く飛び出し、人形遣いが目にも止まらぬ速さで幽霊と化した人形を回す。父の亡骸の象徴でもある手押し車を慈しみ、悼むようなアンナの寄り添う姿勢と手つきには、どんなに利己的で欲深い精神の中に傷つけられても、愛するものがあるひとの魂を感じさせた。

ファウストとドン・ファンのどちらにも仕えたカシュパーレクが風刺する、利己的で哀れな人間模様。カシュパーレクが「またご主人を探さなきゃ」と観客に話しかけると、人間性への問いは観客へと向かう。さらに、操り人形を舞台上下手手に配置しながら転換する様が、この物語の舞台裏を観客に提示し、操られ揺れ動く人形世界と人間世界の深遠を共に覗くことを可能にした。

1つの物語の枠を超えた、輪廻の物語。モノと、ひとと、人形が、共に共犯者となり、手を取り合って幕を閉じた。そこに下北沢国際人形劇祭への情熱と熱狂が、この日が終わっても何度でも再生されることを想い、期待し、自らの欲望の底知れなさをも感じたのだった。シュールクリーム一座（デイリージャーナル編集部）



絵: Mayuky Kahn (デイリージャーナル編集部)

大 男三人が、野太く迫力のある声で、がしゃんがしゃんと金属の響く人形を動かし、炎があがり煙がたち、音楽が鳴っています。この2つの喜劇は、どこか狼狽な雰囲気があり、カオスな路上のイメージを想起させるふしぎな作品でした。人形の細やかな動きにたいして、操り手たちの巨大というギャップが醸し出すユーモアがありました。私たちは彼らの繰り出す繊細な技術と、可笑しみのあるストーリーに何度もくすりとさせられました。私が印象的だったのは、人形の素材です。

パペットというと、柔らかい印象があります。ですが、これらの作品に登場する人形や道具は、金属の硬質なイメージをもつ素材で、彼らが人形を動かすたびに、または、ステージに人形を登場させるたびに、がしゃん、という大きな音が出るのが、これらの作品の野生的な雰囲気を醸成することに貢献していると感じました。

一作目『ファウスト博士』が終わり、二作目の『ドン・ファン』が始まると、一作目に登場した人形がふたたびあらわれ、ドン・ファンの世界をもちあげていきます。私たちが人間の演劇をみるときと同じように、俳優が他の役のイメージをもって登場し、そのことが観客の観劇体験にも大きな影響を与えています。人形は人間よりも、より役に近づいているようで、その姿が見られるだけで、観客は爆笑します。

ファウスト博士の世界は、怪しげな雰囲気を醸し出し、この作品の開幕前に「小さいこどもは近づかないように」と警告が発せられますが、私たちが恐怖や恐れに好奇心を発揮して関心を抱くことをこの作品はとても理解していると思われました。私たちは怪しく、得体のしれないものに惹かれていき、そして人形の世界に入っていくと、いつの間にか笑ってしまっている

という、愉快的な経験をするようになります。暗闇、炎、野太い声、音楽…、これらは「喜劇」を彩る「怪しさ」です。まるで路上のインチキ商売のような、人形劇のもつ「怪しさ」に触れられる、貴重な経験となりました。森田諒一（デイリージャーナル編集部）

人形劇と言われて一番に想像する人形劇そのものであったのが、アルファ劇場による『ファウスト』と『ドンファン』であった。木と金属、布といった異なる質感の素材を組み合わせて作られた人形たちは木の温もりも、金属の軋んだ音も、布の柔らかさをも併せ持つ。特に『ドンファン』でそれまでの金属製の身体の中から布が現れることで幽霊を表現したのは素材の特徴を活用した面白い演出であった。心臓の表現として人形の服の下に自転車に装着するような赤色灯を用いたり、ひげがフォークになっていたりと人形製作の工夫が凝らされている様は語りの面白さを引き立てる。この身近な物による創意工夫は親近感を観客に与え、物質の可能性を提示する。本来意味のない点や線を顔と認識することを「シミュラクラ現象」と言うそうだが、それに近い想像力の広がりがあり、使用されている物質の元の状態が想像し得るだけに物質から人間らしさを発生させる技術にも気づかされる。人形が動く度に聞こえる軋みは音楽の一部となって作品にリズムを発生させる。そこに重なる操演者によるセリフや演奏者による楽器の音色はオブジェクトと人間が融合した空間を提供する。オブジェクトの背景にある人々の手仕事や技術が想像される公演であった。

宮原紗代（デイリージャーナル編集部）



絵: 大澤萌 (デイリージャーナル編集部)